ウェブでつなぐ 生涯を通じてのインクルーシブな学び

Profile

引地　達也（ひきち　たつや）さん

一般社団法人みんなの大学校学長。上智大学大学院文学研究科新聞学博士後期課程修了。毎日新聞社記者を経て共同通信社入社。退社後はメルボルンでオーストラリアの核問題を研究し、帰国後、大手金融機関の経営コンサルタント等に従事。東日本大震災でのボランティア活動をきっかけに、支援が必要な場所への活動を展開。前身シャローム大学校から引き継ぎ、同法人を設立。福祉サービス事業でも公的な教育事業でもなく、現代の支援が必要な方の学びたいというニーズを研究し、共生社会における「インクルーシブ」な学びを実現している。

事業内容

【設　　立】2020 年 4 月
【所 在 地】東京都国分寺市本多 2 丁目 1 番地 14
【受講方法】

①ウェブ通学型
カリキュラムにのっとってウェブ講義とスクーリングで学ぶ「通学」型。

②訪問型
重度障害者向けに教育提供者が自宅や医療施設に訪問して講義や学習を行う。

③連携型
本大学校と連携する全国各地の支援が必要な方の学びの場を遠隔でつないで共同の講義で交流する。

【利用期間】

基礎課程
学び方や社会のなりたち、コミュニケーションの考え方等を学問として考えられるための基本の課程（2 年）。

専門課程
1つのテーマを掘り下げて考えて発表する課程（2 年）。

みんなの大学校案内

【授 業 料】月額 25,000 円
（聴講登録料は月額10,000円、
登録法人費は月額100,000円）

【ホームページ】https://minnano-daigaku.net/

みんなの大学校を発足したきっかけを教えてください。

初めに、なぜ福祉分野に携わるようになったかの経緯をお話しします。私は元々、国際報道を主に担当する新聞記者でした。取材で困難の中にある人たちと関わり、取材活動や記事の作成よりも、私は自分がその人々のプラスになるための支援として貢献したいという思いが強くなりました。新聞記者を辞め、海外を拠点に活動をしていましたが、2011年の東日本大震災をきっかけにそれまでの仕事を辞め、民間のボランティア団体を立ち上げました。

ボランティアでは、物資の供給や家族を亡くした人への傾聴等の支援を行っていました。知的障害の施設や宮城県の沿岸部の人たちとの関わりを通して、対話的コミュニケーションは福祉にも有効だと考えるようになりました。同時期に、コミュニケーションアドバイザーとして、主に精神疾患を対象とした都内の就労移行支援事業所と関わりはじめ、支援に必要なコミュニケーションを継続的に行おうと、私が管理・統括する就労移行支援事業所（就職をサポートする通所型の福祉サービス）を作りました。

立ち上げ後、事業所には多くの人が集まり、来所者の中には従来の福祉サービスに当てはまらない人や、自治体の方から難しい案件の人たちの支援を依頼されることもありました。この頃から、コミュニケーション自体が相互理解をするための学びの機会になると実感しました。田中良三※1先生との出会いや、文部科学省の委託事業「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究」による取組を通して、コミュニケーション交流を中心とした福祉型ではなく、学校型の「学び」の場を作りたいと考えました。

さらに、新型コロナウイルスの影響により、通学できない学生をウェブ上でつなぐ環境をつくる必要があると感じ、2020年に「一般社団法人みんなの大学校」を発足しました。

※1 田中良三：1946年富山県生まれ。愛知県立大学名誉教授。ＮＰＯ法人見晴台学園大学学長。全国障がい者生涯学習支援研究会会長。福祉サービス事業とは別に独立した特別支援学校卒業後の学びの場を作った。

具体的にどのような仕組みを作ろうと考えましたか。

みんなの大学校は「どこでも誰でも繋がれる」をコンセプトに、ウェブでつながることを主な事業としています。障害者が情報弱者になることへの懸念もあり、コロナ禍の中で、ソーシャルディスタンスが求められる状況の下でも、どこでも誰でもつながることを目指しました。集合型で何かを実施するにしても、学校に行けない人もいますので、その方でも参加ができる方法として、ウェブ通学型や訪問型、連携型を設定しています。現在、学生として登録している人の中には、重度の障害がある人やひきこもりの人たちもいて、様々な人が参加できる仕組みで授業を行っています。

また、学校型ですので「卒業」や「修了」という仕組みを取り入れ、大学と同じように単位制を取っています。勿論、落とすための単位ではなく、その人が取り組んだことをきちんと証明するためのものであり、成績証明書もあります。カリキュラムは、前期後期各15回、HPからも内容等を確認できます。大学と同じように、レポートや参加等で単位を付与し、修了としています。ポイントは1時間の授業を90分ではなく、集中力が保つ50分に設定して、対話を入れた授業を行うところです。オンデマンドも一応実施していますが、基本はオンタイムで、みんな「同じ場所、同じ時間で一緒に」ということを大事にしています。

みんなの大学校の学生はどのような方が多いですか。

ウェブ通学型の学生は、精神疾患や発達障害のある方など様々ですが、やはり「学び」に関心があるのは共通していると思います。

訪問型の授業では、学生の自宅に週に1度訪問する形で実施しています。日常的に医療的ケアが必要な「重症心身障害者」で、視力もなく、発語も難しく、体もほぼ動かないという方もいます。しかし、保護者もヘルパーさんも、授業をする度にその方の反応があって、とても興奮していることに気が付いています。この反応は、何かを学んでいる表れだと、保護者と一緒に信じて、彼に大きな期待を寄せています。

今後の目標について教えてください。

みんなの大学校は、今後も皆さんのプラットフォームになりたいと思っています。そのために、私はみんなの大学校が就労継続支援B型事業※2所として指定を受けることを目指しました。学びと仕事を両立させて継続した学びを実現させるとの考えで、大田市場の野菜の仕事を請け負うと同時に、コロナ禍でリモートワークが推奨される中で、障害のある人にもその可能性を広げたいと考えました。訪問型を行っていた重度障害のある学生も自宅の作業が可能であれば、就労継続支援B型事業の訓練が成立し、社会につながるステップアップになると思ったのです。実際に、その方は肩の小さな筋肉の動きでパソコン入力ができるため、Facebookの更新を仕事にし、就労継続支援B型事業を認めてほしいと行政に掛け合い、2020年夏に承諾を得ました。彼の保護者も、就労継続支援B型事業で社会と関わり、対価を得られることに喜んでいました。「学び」を通じて、自分の可能性が広がり、就労につながったケースだと思います。

また、別の学生は、ヘルパーさんと一緒にアート作品を作ってFacebookに載せたところ、青森大学のゼミ生が反応したことをきっかけに、青森大学と遠隔での交流が始まりました。

私たちは、障害がある方に「学びたい」という気持ちを伝えていただき、皆さんに活用して頂ければと思います。また、授業や学校の仕組みの中で話した成績証明書は、国家的資格ではありませんが、就職面接の際に私が推薦状と一緒に提出しています。努力した点を会社の方々に認識して頂き、「みんなの大学校の卒業生はいいよね」という実績を積み上げ、保護者の方々にも安心していただける場所にしていきたいです。この2年間、授業や福祉サービス、就労支援、企業との折衝といった活動を少人数で行ってきましたが、現在の活動を維持・発展させていくためにも、一人ひとりの個人にとって何が一番良い教育なのか、何が良い支援なのか、そんなイメージができる仲間を沢山作ることができれば良いと思います。

※2 就労継続支援B型事業：年齢や体力などで雇用契約を結んで働くことが困難な方が、軽作業などの就労訓練を行うことができる福祉サービス。

最後に読者へメッセージをいただけますか。

私がアドバイザーを行っている特別支援学校で保護者向けの説明会があったのですが、複数の保護者の方から、子供の将来について不安だと相談を受けました。聞いているうちに、その保護者たちが既存の枠組みに囚われ、その枠組みに自分の子供を当てはめようとしていることに気づき、障害のある子供が何をやりたいのかが抜けているように思いました。

子供たち一人ひとりが持っているイメージを、将来どのようにつなげていくかを考えた方がいいと思います。子供たちがやりたいことは荒唐無稽でよくて、「空を飛びたい」とかでもいいと思います。飛ぶために何をするかということを、一緒に一生懸命考えていけたら、それは充実した「学び」になり、将来につながっていくのだと思います。また、社会をより充実させるために、誰かがやってくれるのを待つのではなく、あなた自身が社会の一員として何ができるかを考えることも面白いと思います。